

イーディス・ウォートンの作品におけるホーソーン的なものを求めて

上 田 み どり*

—— 序 ——

ナサニエル・ホーソーン（1804－1864）とイーディス・ウォートン（1862－1937）の生存期間が重なり合うことはない。また、男性と女性であり、それぞれの育った家庭環境および、社会階層・階級を比較して、それぞれ、アメリカ中産階級と上流階級と仕分けできるかもしれない。従って二人の異なる点ばかりが、一見目につく。しかしそれにもかかわらず、作品の底流に流れる精神性は、極めてニューイングランド的と呼べるような風合いを描く気がする。そういったことから、この二人のアメリカ人作家のニューイングランド的精神性に共通性があるのか、ないのかこの論文において考えてみたい。また、アメリカ建国期のアメリカ人を描いたホーソーンが、次世代の作家、ウォートンの作品に、ニューイングランドの精神風土としてホーソーン的なものが通底しているのかいないのか、この拙論において、検証してみたいと思う。

1. 幼少期

二人の幼少期における性癖及び家庭環境はよく似ている。二人とも読書することの楽しみ、満足感を味わっている。ホーソーンは幼少期足をいため約三年間戸外で遊ぶことをせず、屋内で読書にふけたという実話はみなを知るところである。ウォートンも幼少期は活発なアメリカ娘ではなかったようである。当時富裕階級の家庭では家庭教師を雇っていて、家庭方針に従って教育されたことも特徴的であると同時に、ウォートンは病気がちであったため、両親は学ばせることよりもむしろ健康を案じていたことが自伝にも記されている⁽¹⁾。戸外で遊ぶことのできない間に古典を読んで過ごした。その文学的素養が、後の彼らの作品の滋養となったことは、ウォートンもホーソーンにおいても同じことだろう。ウォートンは、少女期、父親の

* 広島経済大学経済学部教授

書齋で過ごした思い出を『回想録』 *A Backward Glance* (1934) で語っている。

I have wandered far from my father's library. Though it had the leading share in my growth I have let myself be drawn from it by one scene after another of my parents' life in New York or on their travels. But the library calls me back, and I pause on its threshold, averting my eyes from the monstrous oak mantel supported on the heads of vizored knights, and looking past them at the rows of handsome bindings and familiar names. (BG p.64)⁽²⁾

上記のように、何度となくウォートンは父親の書齋を想起する。その中で、ニューヨークについて、戸外は単調な通り、建物もなく、ヨーロッパにあるような大聖堂もなく、歴史的な過去を伝える建物がなかったことを嘆いている。⁽³⁾ このことは、ホーソンがかつてアメリカには、想像力をかきたてるものが何もないことを嘆いたことを思い出させる。

そのような思いが幼少期を経た二人それぞれが描く、19世紀中葉そして20世紀初頭にかけてのアメリカといったものに、どのような作品として顕れ出るのか、登場人物がどのような人物像として描かれるのか、そのことによってニューイングランド的なものの特殊性に共通点が見出されるのか、探してみる。

2. ホーソンの描く女性

ホーソンの代表的作品に登場する女性主人公、*The Scarlet Letter* (1850) の、Hester Prynne、*The Blithedale Romance* (1852) の Zenobia、*The Marble Faun* (1860) の Miriam、といった比較的色の濃いダークなイメージの女性群をひとつのカテゴリーとしてあげられる。短編 'Rappaccini's Daughter' (1844) の Beatrice にもその外見の属性は一つの特徴として付与されている。そしてこれらの女性の世界は、閉ざされた世界にあり、その中で他の登場人物を圧倒せんばかりの生命力溢れるものである。

ホーソンの代表作、*The Scarlet Letter* の例を挙げてみよう。情熱的女性の代表として Hester Prynne が、パートナーとして登場する Dimmesdale 牧師に次の発言で諭す場面である。

“...Not so! The future is yet full of trial and success. There is happiness to be enjoyed! There is good to be done! Exchange this false life of thine for a true one. Be, if thy spirit summon thee to such a mission, the teacher and apostle of the red men. Or,—as is more thy nature,—be a scholar and a sage among the

wisest and the most renowned of the cultivated world. Preach! Write! Act! Do any thing, save to lie down make thyself another, and a high one, such as thou canst wear without fear or shame. …that will leave thee powerless even to repent!⁽⁴⁾ Up, and away!” (SL p.198)

上記の言葉は Hester Prynne の最も力強い情念の塊から発した大胆な言葉である。そのような彼女の説得を持ってしても、牧師 Dimmesdale はその閉ざされた社会からは逃れることはできないし、逃れようと牧師自ら行動は取らない。後で死を持ってのみ Dimmesdale は解放される。そしてこの大胆な勇気ある発言をした本人、Hester Prynne の行動を最後まで追ってみると、娘 Pearl のいる海の向こうの広い世界、つまりヨーロッパに一度は行くのだが再びニューイングランドの地に戻ってくる。これが Hester の精神性の特徴であり、ホーソーン的女性を描く際の精神性のひとつの提示だと思われる。

また、短編 ‘Rappaccini’s Daughter’ の Beatrice のように、温室花壇という一定の場所においてのみ語られる、毒性を持った女性の意味するものは何であるのか。植物（花）は女性（Beatrice）のセクシュアリティと結び付けられるのは、19世紀においてすでにステレオタイプ化しているといわれる。⁽⁵⁾ 前述の *The Scarlet Letter* の Hester が娘 Pearl を抱いて登場するのは、薔薇の茂みに囲まれた牢獄からである。セクシュアリティを表象する薔薇を物語りの初めに遡及させるものである。一時的に牢獄からさし台に上げられ、二人は再び牢獄に戻される。

Beatrice の世界は、この物語の舞台であるイタリアの植物学者の庭という設定の中で起こる。彼女の生命力はセクシュアリティと結び合っていて、結局その狭い世界では収まりきらない風にも描かれる。

このことは、当時の現実社会において、大胆奇異とみえたり、反社会的、むしろ官能的生命力溢れる彼女たちにあって、背後に潜む「原罪」や「先天的墮落」から人間は逃れられないとホーソーンは見抜いてもいて、真実を語ろうとするその世界は陰気で邪悪に満ちている。

ホーソーンは1840年代にエマソン (Ralph Waldo Emerson [1803-82]), ソロー (Henry David Thoreau [1817-62]), フラー (Margaret Fuller [1810-50]) といった代表的超越主義者と交際しており、その時代の鑄型に人間の心が流されているのではないかといった思考を基礎としているように思われる。彼らは、意識内に宿る神を信じて疑わない。従って、負の方向に向かう運命も、ある程度人間の善の力で調整できると信じているわけで、社会の既成概念を自己の規範とするのではなく、

個人の思考に求める⁽⁶⁾。このことは、Hester が自分の行為の基準を、実際には、自分とディムズデールの関係にしか求めなかったこととも一致している。この行為は、自分の本質に合っているものだけに従おうとする自己本位で身勝手なものにも成りえるのだが、人間は機械のように取り替えがきかない貴重な存在であるとする、人間性重視の姿勢も伺われるのである。

このことは森におもむいた Hester の心情を発する言葉に表わされる。

The stigma gone, Hester heaved a long, deep sigh, in which the burden of shame and anguish departed from her spirit. O exquisite relief! She had not known the weight, until she felt the freedom! By another impulse, she took off the formal cap.... There played around smile, that seemed gushing from the very heart of womanhood.... All at once, as with a sudden smile of heaven, forth burst the sunshine, pouring a very flood into the obscure forest, gladdening each green leaf, transmuting the yellow fallen ones to gold, and gleaming adown the gray trunks of the solemn trees. The objects that had made a shadow hitherto, embodied the brightness now...Such was the sympathy of Nature—that wild, heathen Nature of the forest, never subjugated by human law, nor illumined by higher truth....(SL pp.202-203)⁽⁷⁾

上記の描写からは、Hester の心にピューリタンの示す神ではなく、自然という神、あるいは自然が一体となった霊に似た存在が、彼女を見ている、あるいは見守られているといったような感覚を提示する。彼女が解き放たれる場面である。自然の中では人間本来の善や人間性豊かな姿に帰れることを上記の節は示しており、その点においてホーソンの自然観はエマーソンの影響を受けていることは窺える。しかしながら、作品の舞台設定である17世紀は、アメリカ・ルネッサンスの担い手となる超越主義に窺えるロマンス的な要素を反映するヒロインの異質性が強調され、ロマン主義の楽観主義的歴史観や極端な個人主義とは相容れない要素が描かれているように思われる。

また、ホーソン作品においては、自己の創作する主人公の自立の試みと、社会的思潮のバランスを保つかのように、上記人物とは対岸に位置する女性たちを登場させる。*The Blithedale Romance* や *The Marble Faun* のように、ホーソン独自の neutral territory (中間地帯) では、この反社会的な女性主人公たちと拮抗する存在、天使的存在の女性を登場させることも必然なのである。作者ホーソンのアウフヘーベンの試みのひとつでもあろう。

3. イーディス・ウォートンの描く女性の特質

イーディス・ウォートン (1862–1937) は、英国・オランダ系の実業家貴族の出身である。激動するアメリカ資本主義経済勃興の時代兆候が見え隠れする時代にあった経済的背景を持つ作家であることは無視できない。そうした変化の激しい経済環境の中でのウォートンの描く女性が、社会的に落ちぶれてゆく過程をたどる場合がある。しかしそのような経済の動向によって物理的に自らの生き方が左右されるにしても、むしろホーソーンの描く、ピューリタンの風土に醸成された、ニューイングランド的精神性を残す、高い倫理性を持つ人物が多く描かれる。それを単にニューイングランド的と言えるのだろうか。

例えば、*The Age of Innocence* (1920) の Ellen Olenska にしても、彼女を取り巻く Newland Archer とその妻 May Welland も倫理的奈落に陥ることはなく、最後まで登場人物の精神均衡は守られる。*The House of Mirth* (1905) の Lily Bart にしても、窮状にあって、決して倫理的破滅に落ちることはない。自己犠牲、忍従、社会秩序といった中に矜持と高潔性を最後まで忘れさせない。この個人と社会の関係が極めてニューイングランドの独自性を示すかのように思われる。

The Age of Innocence の中、Newland と Ellen が会い、話あう場面で、Ellen が次のように言う。

You had felt the world outside tugging at one with all its golden hands—and yet you hated the things it asks of one; you hated happiness about by disloyalty and cruelty and indifference. That was what I'd never known before —— and it's better than anything I've known. (p.172 AI)⁽⁸⁾

Ellen が言う不誠実や欺瞞、残酷さや無関心といったものは、ウォートン自身が嫌うヨーロッパ貴族社会での既成概念、当然の価値判断であって、そのことで得られる幸せは Ellen の欲するものではないし、Newland も同じ価値判断を持っていたはずだった。Newland の行動は煮え切らないのであるが、しかし当時のニューヨークの上流社会において、誰も傷つかない社会のルールとして当然のようにふるまう。それまで Ellen は、ニューヨーク上流社会から忌むべき存在として避けられていたことに気づいたことを Newland に話す。それは彼女がよしとする価値判断のままに行動するからであり、彼女のソサエティの枠からはみだしているからである。かつてピューリタン社会での Hester Prynne と同じように閉じられたひとつの世界という意味では同じである。Ellen はヨーロッパに一度は出ては行ったものの、ニュ

一ヨークの社交界という限られた社会でも受け入れられない。従って Ellen の場合、再びヨーロッパに戻ることになる。この意味で彼女の活動する枠という限られた世界は、ホーソーンの描く一つの限られた範囲、閉ざされた社会という舞台を提示していることと似ているのだが、この場合、ウォートンは主人公自身の精神性を変えるのではなく、主人公の住む世界を移動する方法をとる。

また、*The House of Mirth* において、主人公 Lily Bart が最後に経済的困窮に落ち入って、死を選ぶほか仕方のない状況になるわけだが、その時点で、彼女の行った行動で、よき理解者であったはずの Selden は真実を知ることになる。

Then, gradually, his troubled vision cleared, old hints and rumours came back to him, and out of the very insinuations he had feared to probe, he constructed an explanation of the mystery. It was true, then, that she had taken money from Trenor: but true also, as the contents of the little desk declared, that the obligation had been intolerable to her, and that at the first opportunity she had freed herself from it, though the act left her face to face with bare unmitigated poverty. (H.M. p.255)⁽⁹⁾

上記の通り、Lily は借りた金を、貧困にあっても返し続け、道徳的に高い位置にいる。その高貴な精神性は、金のために身をおとしめそうな危険性すらない。ウォートンの描くこの場合の主人公は、住む世界を代えることはしないで、その精神性の高みを貫かせることで終わっている。このことはウォートンのほとんどの作品に表れる上流階層の中で、独自の規範を持っていて、それを壊すことはしない場合が多いように思われる。

4. ウォートンの描く異質社会

ウォートンの作品の中でも異質な独自性を著しているのが、*Ethan Frome* (1911) であり、中篇“Summer” (1917) である。“Summer”の主人公は差別された女性で、養女としてもらわれていき、下積みの生活を余儀なくするが、一度恋しその後捨てられ、再び養父のもとに帰る。*Ethan Frome* でも、材木屋を継いだ男が、母親の介護・家事を手伝った女性と結婚するが、病気がちのその妻とうまくいかず、手伝いにきた妻の姪と駆け落ちをしようとして失敗し、結局ふたりとも身障者となる物語である。

ウォートンはマサチューセッツ州の北西に位置し、ボストン市内からバスで約4時間山間に入ったレノックスという、見捨てられた貧しい村の中という場所に、夏

の別荘を持った。彼女はその場所が気に入っていたが、夫は寒さが気に入らず結局長くそこに住むことはできなかったという実生活の体験がある。しかし、この場所での環境にあることが、ウォートンにひとつの傑作を描かせる材料を与えたことになる。前述の“Summer”を仕上げた時の状況を次のように語っている。

Needless to say, when “Summer” appeared, this chapter was received with indignant denial by many reviewers and readers; and not the least vociferous were the New Englanders who had for years sought the reflection of local life in the rose-and-lavender pages of their favourite authoresses—and had forgotten to look into Hawthorne’s. (BG p.294)⁽¹⁰⁾

上記の『回想録』によるとこの作品に対する当時の評判はよくなかったようであるが、ウォートンがホーソーンとの比較でこの作品“Summer”を指摘しているところが、興味深い。当時のニューイングランド社会で、最初ホーソーン作品同様、認められなかったことの指摘がまさにウォートン自身の心の深層にホーソーンという作家の存在の大きさを物語っているのではなかろうかと推察する。

結び

これまでホーソーンを描く女性像とウォートンの描く女性像の比較を試みたのであるが、倫理的・精神的な基本にあるニューイングランドのピューリタン的土壌に根を置きながらも、育った枝は時代の変遷を経て、また、社会階層により、かなり異質な方向に伸びていったように思われる。個人と社会の関係は、伝統的ピューリタニズムの本然的な姿とはかけ離れてしまったようでもある。ホーソーンの時代はピューリタニズムの神への荘厳な畏敬の念と人間的な信頼を併存させ、読者にその二つの均衡による緊張感を与える。またウォートンは自分の住んだ社会階層の規範にあって、保守的といえるほど社会秩序の均衡を保つ中、どこまでも主人公たちに、倫理的高みを保たせるものである。

ホーソーンとウォートンの共通の友人として、Henry James [1843-1916] があげられる。James はホーソーン論を述べて、アメリカとヨーロッパを行き来し、その傍観者の視点、相対的観方がウォートンの作品にも反映される。ウォートンはジェームズとの親交も深く、師と仰いでいたようである。従って、ホーソーンとウォートンの作品の解釈は、ジェームズを接点として異なる展開を試みる必要があるように思う。

ホーソーンもウォートンもそれぞれ時代思潮にあって、画期的違いはないにして

も、少しずつ時代が動き、その社会の意識変化も現代ほどではないにしても、鈍い動きの中で、鋭く先を見すえた作家の感覚が、こうした傑作を生む原動力となったことはまちがいない。

注

- (1) Edith wharton, *A Backward Glance* のテキストは (New York Cherles Scribner's Sons 1964) を使用した。ウォートンの自叙伝からの引用はすべてこの版からであり、引用に続けて括弧内にページ数を示す。p.47
- (2) *ibid.*, p.64
- (3) *ibid.*, p.54
- (4) *The Scarlet Letter* のテキストは, The Centenary Edition of the works of Nathaniel Hawthorne I (Ohio: Ohio State University Press. 1964) を使用した。『緋文字』からの引用はすべてこの版からであり、引用に続けて括弧内にページ数を示す。
- (5) 『英語青年』 Vol.CXL1. -No.10, 1996年1月号 研究社 p.5 武田悠一氏の発言
- (6) "Self Reliance", in *Emerson: Essays & Lectures*. The Library of America (New York Literary Classics of the United States, Inc., 1983), p.266
- (7) *ibid.*, pp.202-203
- (8) *The Age of Innocence* The Complete Works of Edith Wharton, (Kyoto RINSEN Book Co. 1988) p.172
- (9) *The House of Mirth* のテキストは Norton Critical Edition (W. W. Norton & Company. Inc. 1990) を使用した。『歓楽の館』からの引用はすべてこの版からであり、引用に続けて括弧内にページ数を示す。P.255
- (10) *ibid.*, p.294.